

日本盆栽作家協会 会報



第2号

平成6年11月1日発行



特別出品 高木盆栽美術館

主木/五葉松 銘【稲取】 南蛮栴円 高 84 cm

軸/【室間茶味清】橋本独山筆

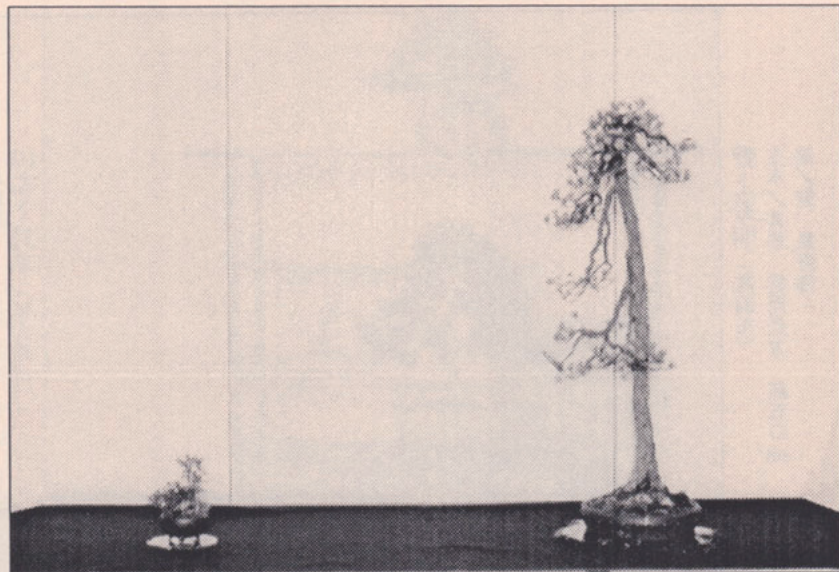
添/やぶこうじ

第二回 作家展

会期／平成5年12月10日～12日

会場／東京美術倶楽部2F全室 主催／日本盆栽作家協会

後援／(財)高木伝統園芸文化振興財団 日本盆栽協同組合 (社)日本阜月協会
日本阜月協同組合 日本水石協会 (株)近代出版 (株)栃の葉書房 (株)新企画



小出征男(東京都)
主木／五葉松 南蛮丸 高一一九cm
添／トキワヒメハギ

作家展を活動の軸として

代表幹事 山田 登美男

日本盆栽作家協会も、平成三年七月の発足以来すでに三周年を過ぎ、この十一月十一日には「第三回作家展」を開催する運びとなりました。これは、多くの方々のご支援の賜物と深く感謝する次第であります。

盆栽はいまや自然と人工の調和による「緑の芸術」として広く普及し、国際的にも多大の評価を得ております。また、環境保護の機運も高まるなか、盆栽作家の果たすべき役割もけっして小さくなく、ますます豊かな感性を磨き、自然愛を基調とした芸風を確立することが求められております。なお、本協会が主催する作家展は、このような趣旨に基づき、盆栽文化の一層の発展、さらに盆栽作家の社会的地位の向上を目的として、作家精神の高揚と会員相互の研鑽に努めるもので、併せて出品作品から優秀作を顕彰するものであります。

●高木伝統園芸文化振興財団賞

一点 賞金五十万円

●日本盆栽作家協会賞

一点 賞金五十万円

〔審査委員〕順不同・敬称略

高木伝統園芸文化振興財団賞 高木禮二
日本盆栽作家協会賞 山田登美男 小出征男

江坂泰樹 野上寿明
須藤進



山田登美男(大宮市)

主木／五葉松 銘「清福」 古渡烏泥長方 高60cm

軸／「日々日々又日々」清水公照筆

添／琵琶床／ウラジロシダ他寄せ植え



須藤進(栃木県)

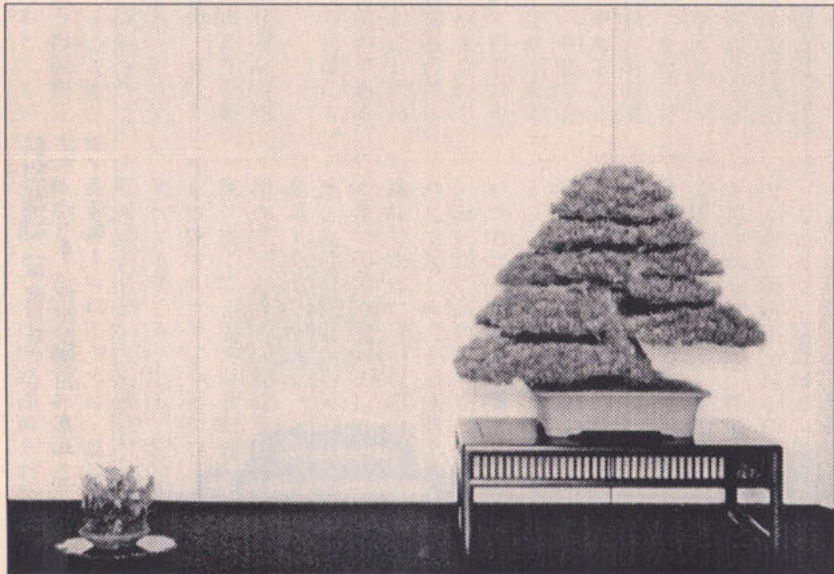
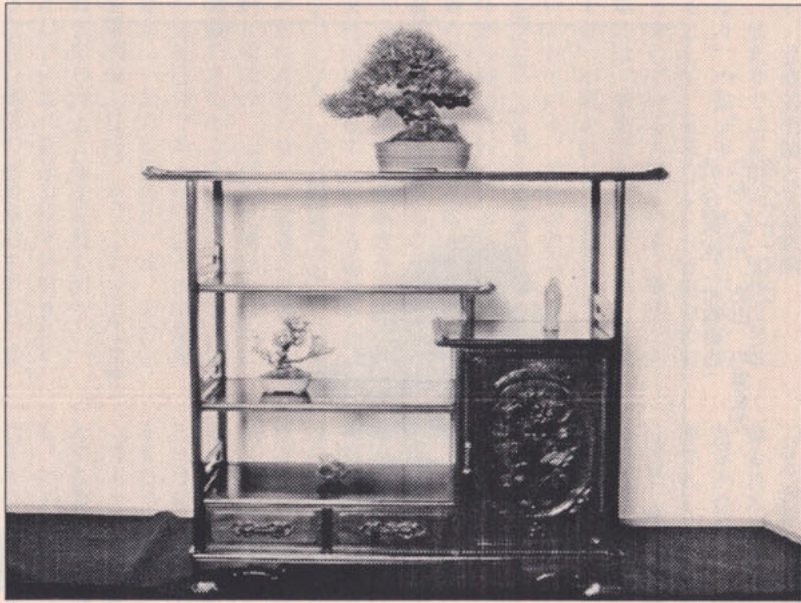
主木／五葉松 紫泥長方 高72cm

軸／「旭日清波」上田聖牛筆

添／やぶこうじ

盆栽の芸術性について
丸島 伸也 (日本盆栽学会)

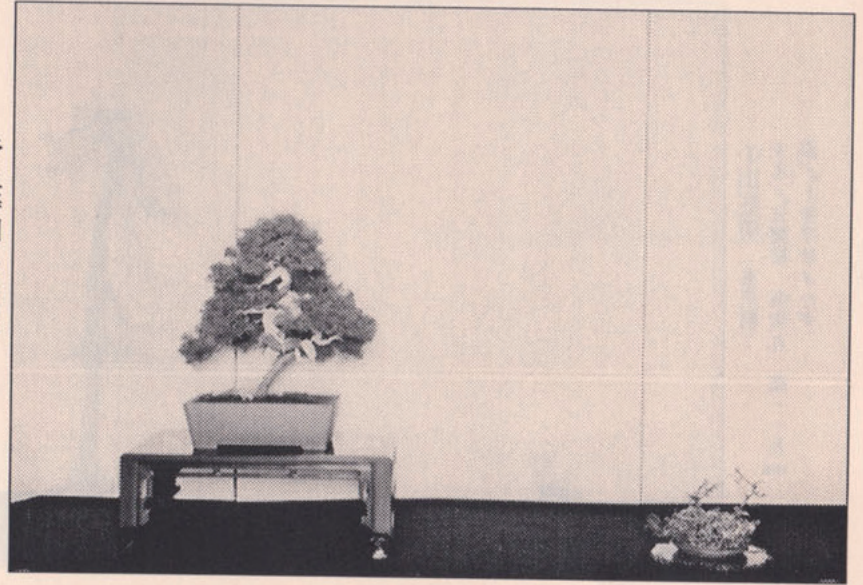
山本千代年 (東大阪市)
小品棚飾り (上段/黒松十六cm 朱泥長方、
中棚/長寿梅 瑞穂楯円、木彫り・高士像、
下段/草・寄せ植え)



中山清司 (小山市)
主木/五葉松 和長方 高五五cm
添/岩オモダカ

盆栽の芸術性について
丸島 伸也 (日本盆栽学会)

野上寿明 (高岡市)
主木/真柏 紫泥長方 高五〇cm
添/笹、長寿梅



江坂泰樹 (山梨県)
主木/皐月・大盃 和丸 高七五cm
添/しもつけ、雛草

盆栽の芸術性について

丸島 秀夫 (日本盆栽学会)

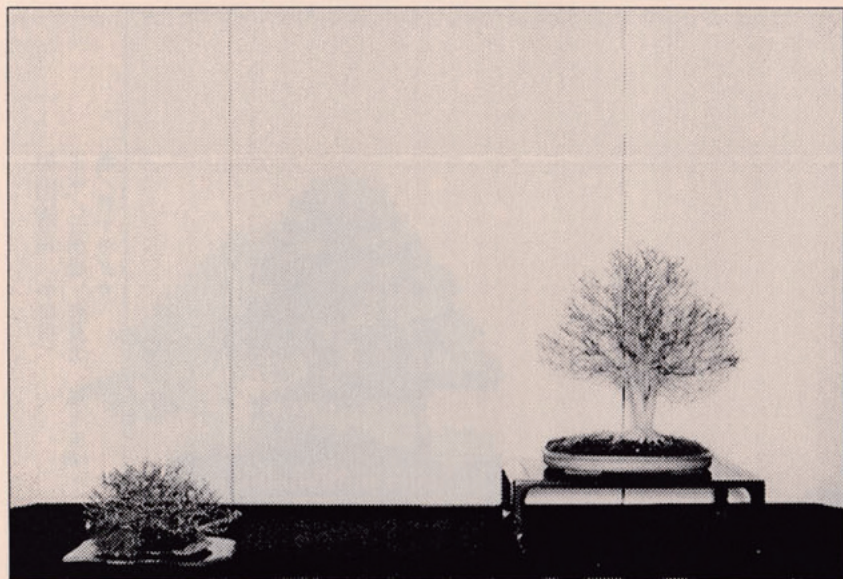
一、盆栽芸術論と反盆栽論

盆栽界では圧倒的に「盆栽は芸術なり」の論が多い。盆栽が芸術であるとして、盆栽作りに日夜懸命の努力をしている人達もいる。明治二十六年には、東京で大規模な「美術盆栽大会」が開かれ、「美術盆栽図」が刊行されている。盆栽の最高の展示会（国風展）が東京都美術館で、昭和九年から開催されていることを盆栽芸術の公的承認とする論もある。また、盆栽が芸術であるからこそ、社団法人日本盆栽協会は農林水産省でなく、文化庁に所属するとする論もある。（もっとも、文化財保護法中に「盆栽」の語は存在しない。盆栽が有形文化財になるか、天然記念物になるかは議論のあるところである）。日本最大の盆栽団体である社団法人日本盆栽協会（一九六五年創立）は、その定款第四条（目的）で、「この法人は盆栽芸術の向上と普及発展を図り…」としている。農業学校で使用されてきた花卉関係の教科書の中でも、盆栽を芸術とする教科書もある。（ただし、昭和十七年を境にそれは激減しているという）。

日本では盆栽を芸術とする場合、



洪谷賢次 (相模原市)
主木/皐月・晃山 均窯長方
添/やぶこうじ



松田恭治 (神奈川県)
主木/けやき 白交趾楕円 高五二cm
添/長寿梅

「日本独特の」とか、「日本が世界に誇る日本独自の」とかという類の枕言葉が盆栽の語に冠せられるのが普通である。これに対し、中国では「盆景、是我国传统的优秀园林艺术珍品、是植物栽培技术和园林艺术的巧妙结合」、「盆景、是中华民族千百年来形成的独特造型艺术」などといった。本家争いである。ただ、日本の盆栽と中国の樹木盆景は樹形美の表現において異なる点があることも事実として認められる。中国の水盆景の形も日本の石付盆栽の形と相当に違う。盆石（水石）の形は中国の怪石形を日本人は好まないし、道家的な山水庭園の怪石異石の類に至っては不快感さえ感じることがある。日本人の理解を超えるのである。これは両国の風土、文化の相違によるものである。

アメリカの盆栽界では盆栽を芸術とする論が圧倒的に優勢のようである。アメリカ最大の盆栽会 BCI (Bonsai Clubs International) はその会則の「目的」の項で、盆栽を「Art (芸術)」として規定し、盆栽芸術とその関連芸術の啓蒙運動と出版物による普及の推進などを図るとして

る。

ドイツでは盆栽を「sehr alle japanische kunst」(非常に古い日本の芸術)としている百科事典もある。ところで、盆栽ほど「美しい」かどうかの評価が分れる存在は少ないと思われる。また、日本では盆栽に「隠居の道楽」という貶化(へんか)の評価がつきまとうと指摘する学者もいる。

人間がある物事を「美しい」と思う時、それはその物事に対して「快よい(こころ)」感情を持つ場合が多い。ところが盆栽を見て、「草木を狭い鉢に閉じ込めて、切ったり曲げたりして楽しんでる残酷で嫌らしい趣味である」と不快感を覚える人達も多いのである。中には、盆栽を思想と良心の問題として、盆栽家を白眼視する場合もある。「珍奇は平凡に如かず」として、愛盆をこごとく掘り捨ててしまった日野資朝の行為を称賛する人々の中近世のみならず、現代にも多くみられる。「徒然草」美学は今日においても生きている。これらの人々にとっては、盆栽は美ではなく、むしろ醜であるから、盆栽を芸術としては到底認められない。

西洋人の中にも、盆栽を生命ある樹木に対する拷問 (Torment) として、否定的に見る人々もいる。

これに対し、愛盆家は自分達ほど草木を大切にしている者はいないと思っており、また、「草木などは心生ひに生ひたるは、拙つまきものなり。人近にて、朝夕、撫でつくるひたるなん、姿、有様、なさけ侍る」(宇津保物語) という見方を支持している。

「自然がすべて美であるわけではない。人間の美的理想と調和した自然こそが美なのだ」という理想は、一種の観念論的美学に通ずる近代性を持つている。盆栽家にとつては、「盆栽は自然樹以上に美しい」のである。盆栽については、これほど美醜の評価が分れる以上、「盆栽は芸術なり」という社会的コンセンサスは日本でもいまだに形成されていないと思われる。

「盆栽は芸術か」というテーマについて、ここで私の見解を述べておこう。盆栽が芸術か否かということとは理論的な問題である。個々の盆栽が芸術品であるかどうかとは関係ない。しばらく好悪を離れて考えてみる必要がある。結論からい

ば、私は盆栽は芸術であると考え。しかし、芸術とみるだけで終わるものではないと思っている。盆栽は鉢などの狭い空間に草木や時に石を使つて、広大な山水樹石の世界を表現するものであり、後述するように、「山水画」と同じ「山水芸術」の一種である。ここにいう「山水」とは単なる山や川ではなく、俗界に対峙する精神的象徴であり、哲学、宗教、歴史、文学、美術などの文化的価値と不可分に結びついた存在である。従つて、「山水芸術」は奥が深いのである。古人は言った。

「山水を観るもまた、書を読むがごとし、その見趣の高下に随う」と。盆栽は外形的な様式美を觀賞するだけでなく、形而上の世界もあることを忘れてはならない。

したがって、盆栽を芸術として考へるとすることは、盆栽の一面を把握するにすぎない。東洋の「山水画」を西洋の Landscape Painting (風景画)。一七世紀になつてようやく絵画の独立した主題となつた) の概念で律しきれないように、盆栽も芸術論だけで解明できるものではない。

しかし、盆栽は「芸術」(Art, Kunst)

としての面も有している。盆栽をこの面から考察することも、また有意義なことである。

芸術のジャンルに属することによつて、社会的権威も増大するし、名品を作出できれば盆栽作家は園芸家から芸術家 (Artist) になれる。「芸術」という概念を通じて、世界的なネットワークも形成できる。また、芸術論的に盆栽を考察することによつて、盆栽の芸術的特性や他の芸術との異同優劣を究明することができ、更に、盆栽論と実践運動を活性化させることも期待できる。以下はそうした観点からみた私の盆栽芸術論である。

二、芸術、芸術美、自然美の概念
用語の混乱を避けるため、まず本稿の用語を確定しておく。

「芸術」とは明治時代に西洋から入ってきた概念で、Kunst (独)、Art (英仏) の訳語である。

広義 (本来の) では「技術」(Skill)、または「能力」(Ability) を意味する。日本語の「わざ」、「たくみ」に当たる。

これに対し、狭義の芸術は美的価

値の実現を本来の目的とする技術をいう。

Art 中の Fine (Beaux) Art、Kunst 中の Shone Kunst とある。日本語では、始め美術と訳していたが、やがて、芸術というようになった。狭義の芸術は一八世紀に入つて区別されるようになったといわれる。本稿の芸術は狭義の意味である。

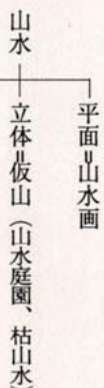
美学上、自然美と芸術美という言葉がある。自然美とは自然的現実に見出される美であり、芸術美とは芸術の所産に帰属せしめられる美である。

「芸術」という語は、中国においても存在するが、本来、①学問と技術、②下笠 (はくぜい。うらない) の技という意味に使われ (諸端「大漢和事典」)、美的な技術という意味はなかった。日本で Art、Kunst の訳語に芸術の語を使用するようになったのをうけて、中国でもこの意味で使用するに至つた。中国で明治以後の「日本製漢語」をそのまま使用する例は多い。

三、盆栽の存在根拠としての「山水」
盆栽は鉢などの器物に草木を栽植

し、樹姿や配置を整え、時にこれに石を使用し、山水の景を創造すると共に草木の自然美を楽しむものである。

これに対し、鉢植は草木を鉢に植えて草木の美 (植物美 (自然美)) を楽しむだけで、樹姿や配置を整えることはせず (従つて様式性がない)、山水の景を作出することを目的としてもいない。盆栽は本質的には、山水画や仮山 (山水庭園、枯山水) と同じ目的で創造されたものである。山水を平面化したものが山水画であり、立体化したものが仮山であり、盆上におさめてしまったものが盆仮山、即ち盆栽、盆石 (水石) である。盆栽、盆石は立体 (又は無軸の) 山水画、無声の山水詩といわれている。



この場合の「山水」は単なる自然の風景とは異なる。それは非常に広い概念であり、自然の風景 (真山水)

のみならず、胸中の山水、絵画的山水、宗教的山水 (神仙道教上の蓬莱山や仏教の須彌山など) などの他に、樹木山水 (松柏、杉、雑樹を主体とする) も含む。石付盆栽、石添え盆栽は盆栽の中でも早くから発達し、よく山水の景を表現する。寄植も同様に深山幽谷や海岸風景などを表現できる。樹木だけの盆栽は山水画のなかから派生した松柏、雑樹画 (樹木山水とも呼ばれる) に対応するものである。従つて、それは背後に広大な山水を暗示しなければならぬ草だけでも、よく「山水」の景を表現できる。

特に、日本の山里の表現は草物盆栽に向いている。「山水」とは、中国で発達した極めて精神性の高い概念である。

すでに、孔子は「知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ」(論語) といっているし、六朝時代の宋炳 (375-450) は「山水に至りては質は有にして趣は靈なり」、「山水は形を以て道を媚 (び) にす」(画山水序) といっている。日本の道元禪師は「而近の山水は古仏の道現成なり」(正法眼蔵) といっている。「山水」は形而

※本稿は「日本盆栽学会」のご好意で、同会の研究資料を抜粋し、掲載するものです。

下的であると同時に、形而上的存在であると考えられてきたのである。従って、山水画、假山、盆假山盆栽、盆石は山水の詩文と同じく、高く深い精神性を宿すことが求められる。

「山水」は盆栽、盆石の哲学であり、存在根拠である。このことがわからなければ、盆栽、盆石論に何方言を費やしても、無意味である。従来の盆栽、盆石論は「山水」論が全く視野に入っていない。これは盆栽、盆石の鑑賞史の実証的研究がなかったからである。

四、盆栽の芸術的特性

盆栽は素材に美的な技術を加えるだけで、ただちに作品として完成するものではない。同じ造形芸術の絵画や彫刻などは、作家が最後の筆を下ろし、最後ののみをふるった瞬間に作品が完成するが、盆栽は針金掛けや整姿剪定が終わっただけでは、まだ完成の途中である。作家の理想とする樹形や山水の景が作出されるためには、さらに年単位の時間が必要である。その間に作家は素材の生命力が自己の企画した形を形成する

のを手入れをくり返しながら、辛抱よく待たなければならぬ。人工の痕跡は天工（自然力）によって消し去られなければ完成に至らない。

逆にいえば、完成までの長期の天工を計算に入れて、人工を施すのが盆栽の技術である。

生命ある素材↓人工↓天工↓人工…↓
天工具盆栽美の完成

素材の生命力と人工との長期にわたる格闘と協調の末に、最後に天工の摂理によって、盆栽美が完成する。しかも、完成した形は年単位で変化し、やがて、また一個の素材として新たな創造が始まる。それはあたかも弁証法的発展を想起させる展開である。自己の肉体を素材として美を表現する舞踊、演劇、歌謡なども、文字通り肉体に鞭うつ激しいトレーニングを経て、初めて人を感動させる芸を身につけ得るものであり、これは盆栽美の創造と共通したものである。

盆栽美の創造とは、このように人工と天工の闘争と協調であるが、人工は最後の一筆を天工にゆだねる。その生命の美を輝かせるために…。画龍に点睛するものは神（自然）で

なければならぬ。陶芸家が火炎という天工に、作品創造の最後をゆだねるのと同じ儀式である。

盆栽の理論と実践において、もっとも優れた愛盆家の一人であった能勢萬氏は、次のように言う。「盆栽は人が作ると云うよりは、神が作られるので、人はその天工を御助けするに過ぎない。御助けするには相違ありませんが、天然を美化するには是非とも其の御助けが必要であります。其處に多くの人力人工を要するので、従って盆栽には、培養する人の個性が顕れます。此点に於て、盆栽は芸術品と言ひ得ます」。また、盆栽は「天工即ち自然力を主要とするには相違ないが（中略）、人力を以てて天工を補導啓沃せねばならぬ」。

能勢氏は盆栽美の創造者は神であり、人間はその補助者として、神を助け導き（補導）、自分のよいと思ふことを申し上げる（啓沃）、そこに盆栽創作の芸術性があるというのである。

盆栽美とは、神の創作（自然美）であると共に、人間による創作（芸術美）たる面を有する。それは天工だけでも出来ないし、人工だけでも出来ない。人工的に剪定整姿され、パランスよく統一され、観者に美観を生ぜしめることに成功していれば、一本の樹でもその全体的樹姿そのものは芸術美といえる。各部分がバラバラで調和がとれなくては芸術美は生まれない。ここにも「多様性の統一」の原理がみられる。

草物盆栽も花、草のもつ自然美を鑑賞しつつ、鉢に適当に配植されることによる山水美の創出を楽しむことができる。これは生け花も同じである。

盆栽においては、芸術美と自然美の双方を楽しむのであるが、もし山水の景が上手に表現されず、また樹に統一性がなく、いたずらに、根、幹、枝、葉、花、果実の自然美（植物美）のみが目立ち、人工による統一ができていなければ、盆栽美は成立せず、単なる鉢植えに終わるだろう。

山水庭園も木、草、石、水、の各素材が山水の再現という目的のもとに、全体的に調和がとれていければ、芸術美が生まれる。

各素材が統一なく勝手に自己主張してしまえば、Einheit der Mehrheit

きない。両者の混然一体となった結果が盆栽美である。

盆栽の良否は美醜ではなく、雅俗という基準（ものさし）で計ることが古來行われてきたが、人工にまさった盆栽はどうしても俗に墜ちる。

「神がお作りになった」とみえる盆栽こそが、まさしく神品といえるのである。江戸時代の愛盆家が「前後左右とも人作の跡見えざるを最上の木と極（きめ）たり」（草木錦葉集）としているのも同じ考えである。

五、盆栽の芸術美と自然美

盆栽は園芸から発展したものである。従って、盆栽は園芸的側面である自然美と人工による芸術美の両面性を有する。たとえば、エゾ松とツツジと石の石付盆栽を例にとれば、エゾ松とツツジと石によって、総合的に表現される山水の景は天工と人工による景であるから、自然美と一体となった芸術美である。それは調和の統一、即ち「多様性の統一」（Einheit der Mehrheit）の芸術美である。しかし、盆栽はその素材であるエゾ松やツツジの植物美と自然美も同時に楽しむ。エゾ松の自然に屈曲し

た幹の芸、細かく荒れた幹肌の味、満面蒼煙たる新芽の美しさ、ツツジの紅く可憐な花びら、これらの美は人工によらない自然美である。

この理は寄植えでも一本木でも同じである。盆栽家は山水の美を楽しみながら、草木の種類に応じて、立ち上りの幹味、皮性（幹肌の性質、荒皮性、イボ幹など）、葉性（葉の大小、形、色、つや、八房性など）、幹の苔、花ものや実もの盆栽なら、花や果実の形、色、香などの自然美をいっつくむ。植物美観賞の嵩ずるところ、サツキ盆栽の如く、珍奇な新種の作出に努力し、松柏類で八房性が発見されれば、大変な高値で取引される。これが盆栽の園芸的側面である。盆栽家は木の「わび」「さび」をよるこぶが、これを分析してみると、木の姿（芸術美）のほかに、樹齢や幹肌、或は幹に付着する苔（古木の象徴）などの自然美が決定的な役割を果たしているのである。盆栽家の重視する盆栽美の一つ、「時代」も自然美である。

樹の姿は根、幹、枝、葉の植物美からなるが、それらの各部分が作者の理想的自然樹の創造という目的の

は存在せず、自然の単なる集合体ということに墮する。

イギリス式庭園もローロッパの山水庭園である。幾何学式庭園は草木を丸や三角、四角に刈り上げ配列し、自然に對していかにも、人工による芸術美の勝利宣言をしているようであるが、しかし各素材の植物美も鑑賞されており、やはり芸術美と自然美が同時に楽しまれている。

従来、日本の盆栽界では、盆栽と鉢植えとの区別として、「盆栽とは草木を盆中に培養し、自然美とその情趣とを表現するもの、鉢植えは草木を鉢に培養し、その花や葉の美即ち植物美を觀賞するもの」という理論が有力に行われてきたが（この説のいう盆栽の自然美とは、盆上に表現された風景美のことで、美学上の芸術に当たる）、この定義は盆栽も植物美を鑑賞する面のあることを無視するものであり正しくない。これは盆栽が芸術であることを強調するあまり、植物美観美という盆栽の園芸的側面を見落したのである。また、「盆栽は大木の縮写なり」と定義し、「イ

ミテーションは芸術である。盆栽は大木のイミテーションである。ゆえに盆栽は芸術である」とする論がある。これも盆栽は芸術なりとするための「大木模倣論」であり、盆栽の存在根拠である「山水」哲学を考えず、また盆栽の自然美の面を見落した定義である。またこの定義は喬木盆栽のみを正統盆栽とし、灌木、竹、草物盆栽は盆栽に準ずるものとして、「準盆栽」とするのであるが、これまた無用の概念の定立である。

六、時空間芸術としての盆栽
盆栽の舞台は鉢、その他器物という極限された空間である。山水庭園のような空間の広大さはない。この狭い立体空間の中に、樹草という生きた植物や石などの素材を使って、いかに自己の理想の山水樹石の世界を現出するか、それが盆栽家の仕事である。それはあたかも山水画家が二次元のキャンバスという狭い空間の中に自己の理想の山水を描くために、自己の技術を傾注するのと同じ性質の芸術的営為である。「盆栽は芸術で

ある」というのは、そこにある。ただ、盆栽家の理想とする山水樹石美の世界は整姿と培養という長い時間を経てようやく完成する。また、それは春夏秋冬それぞれの季節に特有の見どころを有する。そこに絵画、彫刻、などの空間芸術とは異なる時間芸術の面もあるので、盆栽芸術は演劇や舞踊と同じ時空間芸術 (Raumzeitliche Kunst) に属する。

盆栽はその形を絵画や彫刻のように、長く保存できないから、芸術ではないという議論がある。しかし、音楽や演劇、舞踊などは始めと終わりがある。有限である。厳密にいえば、これらの時間あるいは時空間芸術は、特定の人間による特定の日時、場所においてしか存在しない。二度と同一のものはない。

楽譜やシナリオがあれば、何回でも再現できるというかもしれないが、同じ人間でも日により、時により、その人のコンディションは同一でないし、幼年、青年、中年、老年によっても芸は違う。（録音、写真、映画に記録しておけば残るというならば、盆栽も写真、映画に残せるからこれは議論にならない。）

要するに、時間芸術や時空間芸術は同一性という点からみれば、ある特定の日時、場所においてのみ存在し、それ以外には存在しないのである。音楽、演劇、舞踊などにくらべれば、盆栽はその芸術としての存在時間は、はるかに長い。

厳密にいえば、絵画も彫刻も材質によって時間の経過とともに、物理的に変質することを免れない。

このように考えると、芸術美の同一性の保持の時間的長短は芸術の要件ではないことは明らかであろう。

いけば花は空間芸術であるが、根がないからその存在時間は短い。いけば花は存在時間から見れば、盆栽よりはるかに短い。盆栽が年単位でその樹姿を変えていくとすれば、いけば花は日単位で終わる。それでも、いけば花は芸術として認められているのである。

七、盆栽素材の優位性
中世禅林の愛盆家が「石付け盆栽の妙境を歌って曰く。

一尺青山一尺池 一尺の青山三尺の池
池中高聳貞泉寄 池中高く聳えて自然に奇なり

種松愛看秋風暮 松を種え愛看す秋風の暮
移竹欲聽夜雨時 竹を移し欲聽す夜雨の時
遊蝶尋花無輪画 遊蝶花を尋ねば無輪の画
吟蛩蓋草有聲詩 吟蛩草を逸れば有聲の詩
圓浮八万四千境 圓浮八万四千境
縮置野僧盆水涯 縮置す野僧が盆水の涯に

盆栽の強みは、生きた草木と自然の石をそのまま素材に使用することである。素材上の弱み（生きた草木）が逆に強みとなっている。前記の詩に歌っているように、盆中の石に松を植え、竹を移し、水をそそげば、そこに忽然と山水が生まれる。草木の選定と整姿培養の苦勞はあるが、筆をとって松を描き竹を写す技術は要らない。絵画ではいくら名筆が精魂こめて写しても、本物の松となり竹と変ずることはできない。蝶が遊び、こおろぎが鳴くなどは夢のまた夢である。左甚五郎の眠り猫が夜な夜な鼠をとったという話は、あくまで非凡な芸術に対する人間の願望である。また、盆栽の素材は生きた草木であるから、一盆上に春夏秋冬、折り折りの自然美と山水美を楽しむことができる。盆栽は時空間芸術でもあるのである。

山水画は山水を写す芸術であるが、その本来の狙いは「氣」を「移す」ことである。それによって氣の韻（びき）が生動するのである。至高靈妙な山水の氣を画面に移すことができれば、観者は山水の氣と一体となり、山水の世界に逍遙することができる。これが宗炳のいわゆる「神遊」である。

しかるに、盆栽の素材は山水の骨である石、山水の衣髪である草木であるから、山水の氣そのものである。石は「氣の核」ともいわれている。氣を移すために樹石を妙写する必要はない。中国では名山大川の石や草木が珍重されるが、それはそれらが靈山の靈妙な氣をそのまま享けているからである。仙丹の素材は神仙道教上の靈山から採れるとされるのも、それが最高の氣を享けているからである。盆石（水石）を身辺に置いて楽しむのも同じ理由である。「氣と盆栽、盆石」の問題は従来誰も論じなかったことであるが、「氣」の面からいえば、盆栽、盆石は山水画に對し、素材上の優位性があるといえよう。

同じ「疑似山水」といっても、盆栽、盆石の素材は疑似ではない。

盆栽は時空間芸術でもあるのである。

盆栽は時空間芸術でもあるのである。

盆栽は時空間芸術でもあるのである。

盆栽は時空間芸術でもあるのである。

盆栽は時空間芸術でもあるのである。

盆栽は時空間芸術でもあるのである。

盆栽は時空間芸術でもあるのである。

盆栽は時空間芸術でもあるのである。

※本稿は平成5年5月20日、清香園における研修会の講演を抄録したものです。

ABAは、発見の契機ともなった脱離現象促進および休眠誘導効果を示す。また、ABAを植物に与えると、その生長抑制が認められる。オーキシン、ジベレリン、サイトカイニンが促進型植物ホルモンであるのに対し、ABAは抑制型であることが特徴的である。ABAの重要な生理作用の一つは、植物の気孔の開鎖を促進することにより、水分の蒸散を調節する作用である。ABAは、ここに述べたような様々な生理作用を示すにもかかわらず、現在までのところ、農業面における実用化はまだ開発されていない。

一・五・エチレン カーネーションの花茎の生長の抑制、休眠、柑橘の果実の熟成が、微量のエチレンによって促進されることが明らかにになり、エチレンが成熟ホルモンとして注目されるようになった。

エチレンは果実の成熟を促進する生理作用のほか、細胞の伸長を阻害し、拡大生長を促進する作用を示す。エチレンの気流中に植物を置くと、葉柄の上側の細胞が下側のそれより大きくなり、いわゆる上偏生長が生ずる。さらに、エチレンは脱離現象

にも関与しており、その主役を演じているものと考えられる。オーキシンを植物に与えるとエチレンの発生が認められる事実から、高濃度のオーキシンによる効果は、この処理により発生するエチレンによるものと考えられる。このような様々なエチレンの生理作用は、農業面で広く利用される。PH4以上で容易にエチレンを発生するエテホン(商品名エスレル)は、アナナス類の開花促進、ナシ(二十世紀)の熟期促進、バナナの着色などに用いられている。

二・ブラスチノステロイド

ブラスチノステロイドは、他の植物ホルモンと類似の生理活性を示す場合と全く異なっている場合の両者が知られている。また、多くの同族体が知られており、それらの構造と生物活性の相関に関する研究も行われている。

ブラスチノステロイドの農業面への応用研究も活発に行われており、いくつかの期待すべき成果が得られつつある。即ち、ブラスチノステロイドは、ムギ、イネ、トウモロコシに對

して増収効果をもたらす。イネ、ムギなどの穂には不良な花が存在するが、ブラスチノステロイド処理により、これが稔実するようになり、増収効果をもたらされる。トウモロコシにおいては、実の先端部分の種子の入り部分が少ない部分が増収となる。ブラスチノステロイドは、低温障害、塩害、植物病原菌による被害、除草剤による薬害などを軽減する作用を有することが示されている。例えば、キュウリ、トマト、ナスなどは、結実期に低温にあうと、結実率が著しく低下するが、ブラスチノステロイド処理によって、正常な結実、果実の肥大をもたらすことができる。また、うどんこ病、灰色カビ病の罹病をブラスチノステロイドは抑制する作用があり、また光合成阻害型の除草剤、シマジン、ブタクロールのイネに対する薬害を、ブラスチノステロイドは防止する。このように、ブラスチノステロイドは、外部からのストレスを解除する作用を有する点は注目されるところで、今後の開発研究によって、好ましい応用技術が開発されることを期待したい。

植物ホルモンについて

高橋 信孝 (東京大学名誉教授)

一・植物ホルモンとは

現在のところ、オーキシン、ジベレリン、サイトカイニン、アブジジン酸、エチレンの5種の化合物群が植物ホルモンとして認知されており、最近、第六番目の植物ホルモンとして認められつつあるブラスチノステロイドが注目を集めている。また生理学的研究によって存在が示唆されている花芽誘導物質なども、その本体が化学的に明らかになれば、植物ホルモンの一つに位置づけられる物質である。これらの他に、植物ホルモンとは認められていないが、植物の生理現象に関わっている物質が多数知られている。これら物質を植物生長調節物質と総称することがある。以下、各種植物ホルモンについて概説する。

一・一・オーキシン オーキシンは最も古い研究歴史を有する植物ホルモンである。植物が光の方向に向かって生長する現象即ち屈光性の発見に端を発し、これに関与する物質として単離された。

オーキシンは植物の幼細胞を伸長させる作用を有する。この伸長効果

は植物の切片において顕著にあらわれ、無傷植物にはあらわれにくいことが特徴的である。

オーキシンは屈光性発現の原因物質と考えられているが、そのほか、頂芽が存在している間は腋芽の生長が抑えられているいわゆる頂芽優勢という現象に関与している。

また、開花、受精後、子房などの肥大による果実の形成にも関わっている。花粉の代わりをめしべにIAAを与えると、受精が起きないのに子房などの肥大が起るいわゆる単為結実を誘起する作用も有している。さらに、オーキシンは落葉、落果などの脱離現象にも関わっており、これを抑制する役割を果たしていると考えられている。また、オーキシンは不定根の発生を促進する作用を有する。合成オーキシン類は、発根剤、着果剤、摘果剤として農業面で用いられている。

一・二・ジベレリン イネが馬鹿苗病という病気にかかると、草丈がヒョロヒョロと高くなり、草色が淡くなる。この病気はイネ馬鹿苗病菌の感染によってひきおこされるもので、同菌によって生産される物質に

よってひきおこされることが示され、ジベレリンと命名された。

ジベレリンの生理作用の最も重要なものは、無傷植物の伸長促進である。この効果は、幼植物、矮性植物に対して特に顕著であり、主として幼細胞の縦軸方向への伸長によってひきおこされる。この伸長促進効果は、ジベレリンの構造、植物種によって異なることも特徴的である。

ジベレリンは単為結実をひきおこす作用を有し、また長日植物(花芽誘導に長日条件を必要とする植物)や、花芽形成に低温の経過を必要とする植物に対して、非誘導条件下で、花芽の形成を促進する作用を有する。

一・三・サイトカイニン 植物の組織切片を無菌的に切り出し、栄養素を含む寒天培地上で培養すると切片から細胞の塊が生じ、これをカルスと呼ぶが、カルスの増殖を促進する物質を総称してサイトカイニンと呼ぶ。

サイトカイニンは細胞分裂を促進すると考えられる。さらに、細胞の拡大の誘起、植物の老化の抑制作用を有する。

一・四・アブジジン酸(ABA)

(財)藤原啓記念館
〒705 岡山県備前市穂浪 3868
TEL(0869) 67-0638

東京での藤原啓の二十年間は波乱に富んでおり、文学を学ぶというより、人生を知ろうとする思想の放浪ともいべき体験の連続であった。文学青年として若い詩人達のグループとの交遊、博文館における編集の仕事を通じて知りあった多くの文壇の人々との交流をはじめ、絵や音楽も学ぶなど、思いついたらすぐ実践するというバイタリテイを見せている。しかし、文学への道はついに開かれないまま、昭和十二年三十八歳

の藤原啓二は東京を去る。郷里に戻ると、友人で正宗白鳥の弟でもある正宗敦夫のすすめで備前焼を始めるが、まだ備前焼など売れない当時地方新聞に小説や随筆を書いては生活を支えた。特殊な勘と技術を要する備前焼だけにいくつもの障害に出会ったが、幸いにも金重陶陽が親切に指導してくれ、互いに師弟というよりも、ともに土を愛し、酒を愛する人生の友として備前焼の名声をもりあげてきた。

後にともに人間国宝となったこの二人の作風はまさに対照的。陶陽の作品がきびしく精悍なのに対し、藤原啓の作品はおおらかで素朴である。それは、藤原啓の人柄をそのまま映している。いつもかざらず、人間がじかに出ている所が広く愛される所謂であろう。

藤原啓 人と作品
藤原啓(本名敬二)は明治三十二年現在の備前市穂浪に生まれた。家業は農業であった上、もともと作家志望であり、中年にいたるまで焼きものとは無縁であった。備前焼を手がけはじめたのは昭和十四年の春、実に四十才の時からである。
彼は少年時代から文学志望であり、俳句や小説づくりに熱中した。同郷出身の文学者正宗白鳥に対するあこがれや賀川豊彦が出版した「一粒の麦」に刺激されて、ついに十九歳の時、代用教員の職を投げうって上京した。



長首壺 (昭和40年代) 高37.4 cm 径 23.3 cm
藤原啓作

藤原啓記念館資料より抜粋

古備前

備前の国は古くから日本有数の焼きものの産地であることが、千年も前に書かれた「延喜式」という本にすでに明記されている。現在の岡山県邑久郡を中心に、一部は伊部の西医王山南麓に鉄砲窯とよばれる半地上式の窯を用い山茶碗や小坏が瓦と



播座壺 (昭和30年代) 高27.7 cm 径 27.2 cm
藤原啓作

ともに焼かれていた。須惠器のような灰色の肌のがほとんどで、ときに後の備前焼を思わせる赤褐色のものもみられた。
鎌倉時代には陶工がいつせいに伊部へ移住。熊山という備前で最も高い山の頂上付近に築かれた急勾配の窯からは「はがね土」とよばれる山土を原料に酸化焼成の備前焼らしい

肌色をもったカメラや壺などの必需品が生まれた。肩に櫛目の直線文を彫つたり、間に波型の文様を入れているものが多い。
室町時代にはいと、陶工達は山を降り、南の浦伊部へと移る。この時代、草庵茶が流行し、備前の窯でも茶陶が生まれる。室町末期には、山土に代って「ひよせ」とよばれる田土を使うようになり、一気にロク口焼が可能となった。ロク口目が顕著なのがこの頃の備前焼の特色となっている。
窯が北・西・南の三つの大窯に集約され、木村・森・頓宮・寺見・大饗・金重の六姓によってのみ焼かれる制度も生まれ、江戸末期まで続くこの大窯時代が備前焼きの黄金時代で、共同窯である所から、作品を見分ける窯印のあるのが特色である。
これから桃山時代・江戸初期にかけて紹鴎・利休・遠州ら茶人が輩出し、詫び茶の全盛期。遠州の手により塗土の技術を生かした優美な伊部焼も生まれた。この頃を頂点に、江戸中期後期と多様化・量産化に傾いた備前焼は次第に芸術性を失い、低迷期に入る。

研修・親睦旅行 倉敷、備前

平成四年の立山・黒部に続く本年の旅行先は倉敷、備前。猛暑の七月十四日、十五日、参加者は七名とやや少なかつたものの、研修に親睦にと有意義なものとなった。

◆一日目。宿舎の倉敷国際ホテルに到着後、さっそくすぐ裏手の大原美術館を見学。



大原美術館にて。右より阿部健一、野上寿明、須藤進、山田登美男、石井敏夫、今井千春の各氏

グレコの「受胎告知」などの名画の数々を展示する本館一・二階をはじめ、いくつかの分館があり、盆栽と特に関連の深い陶器室、東洋館で

は会員もじっくりと見学する姿が見られた。

次いで美観地区を散策。しばし柳枝垂れる川面や白壁に時を忘れたのち、自由行動に移った。

夕刻は料亭「ひさご」で瀬戸内の幸、倉敷美人のもてなしを楽しみ、散会。

◆二日目は備前焼のふるさと備前市へ、人間国宝、藤原啓氏の作品が年別に展示されている藤原啓記念館を訪問。

備前焼は一二〇〇度以上の高温で焼き締められるから、窯の中の炎や灰の影響の違いで、微妙な焼き模様が生まれる。いわゆる窯変であるが、記念館では、土に挑み、自己を

会員だより

●新入会員紹介

江田 博氏

昭和十二年十二月六日生

日立市久慈町五の三二の三

電話〇二九四(五二)五四〇五

※日本盆栽作家協会では広く会員を募集しております。入会資格はプロ、アマを問いません。盆栽作家として

昇華させた陶芸家の軌跡に触れることができた。

また、作陶場も案内されたが、簡素でいて清潔な室内、さらに備前湾の眺望はことに印象深く、なるほど名作の生まれる環境であると思われる。

陶器も盆栽も自然の恵みによって成り立ち、だからこそ人の心を和ませ、豊かにもするのだろう。会員それぞれ、さらに盆栽づくりへの精進を心に刻んだ一日だった。

◆参加の皆様には猛暑の中、ご苦労さまでした。次回、平成七年度の研修・親睦旅行は福島県(吾妻山)を予定しております。ぜひ奮ってご参加ください。

の自覚と意欲のある方なら、どなたも大歓迎です。

入会金 三〇万円

年会費 五万円

お問い合わせ先

日本盆栽作家協会事務局(小出征男)

〒一五二 東京都目黒区柿の木坂

三二一〇一八

電話 〇三三三四 一一二四三七



高木盆栽美術館奨励賞

神田繁彦 (埼玉県)

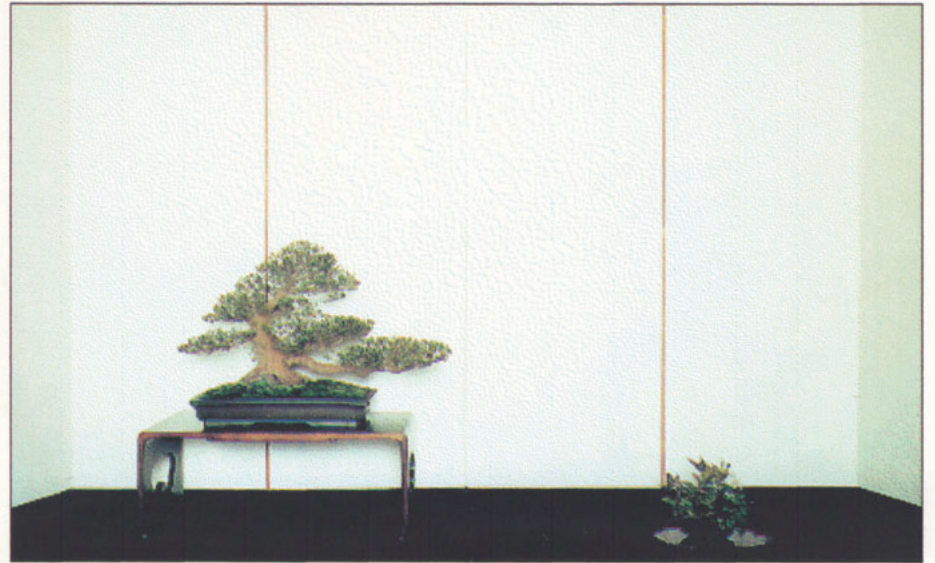
主木/深山霧島つつじ 烏泥丸 左右 113 cm
添/磯寒菊



高木盆栽美術館奨励賞

今井千春 (相模原市)

主木/蝦夷松 紫泥長方 高 56 cm
添/紅したん、野ばら、笹



日本盆栽作家協会賞 磯部孝三（浦和市）
主木／皐月・見山 紫泥長方 高 41 cm
添／岩オモダカ、大文字草



高木盆栽美術館賞 阿部健一（福島市）
主木／米杵 利根鞍馬石付き 左右 115 cm
添／自然石、苔